

「特色ある共同研究拠点の整備の推進事業～スタートアップ支援～」

事後評価結果

大学名	京都造形芸術大学	研究分野	芸術一般
拠点名	舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点		
学長名	尾池 和夫		
拠点代表者	天野 文雄		

1. 共同研究拠点の概要 ※事後評価報告書より転記

[共同研究拠点の目的]

舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点の目的は以下のとおり。

- (1) 「劇場を用いた研究」という新たな研究手法を、広く一般に公開・普及すること。
- (2) これまで文献学的研究にとどまりがちだった日本の演劇学、舞踊学等の舞台芸術関連の研究分野において、「舞台芸術作品の創造と受容のプロセス」を探求するという新しい視点が、研究の発展に「方法論的変革」という形で寄与すること。こうした方法論上の変革に通じる試みは、多くの大学ですでに始まっており、多くの若手・中堅の研究者がその必要性を求めている。
- (3) (中長期的な目標として) 本研究拠点の活動を通じて、大学に所属して研究・教育に携わる舞台芸術における芸術家と学術研究者とが協同して、上記の研究手法に基づいた日本の舞台芸術研究における新領域を確立し、新しい領域横断的な研究者コミュニティを創出すること。
- (4) 本研究拠点における共同研究を国際的に開かれた形で実施することにより、グローバル化の視座から舞台芸術の譜ジャンルを再検討し、そこでの知見を舞台芸術の創造の場に接続すること。

[共同研究拠点における成果及び目的の達成状況]

「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究」を研究テーマに、平成25年度から3年間進めてきた本拠点の事業は、従来、歴史的にもきわめて手薄だった舞台芸術研究と舞台芸術作品の創造との連携を、「劇場実験」という一般の人文学研究あるいは舞台芸術研究にはない手法を通じて探り、将来の新たな舞台芸術の創造につなげようというものであった。少なくともわが国の舞台芸術創造は、もっぱら劇作家、演出家、俳優、舞台美術家、舞台照明家、音響技術者という、いわば「創造の現場」の専門家（アーティスト）たちによって担われ、そこに学術研究が寄与する余地はきわめて限られていた。要するに、舞台芸術という同じ分野でありながら、「創造の現場」と「学術研究」がほとんど乖離していたのであるが、そのような長きにわたる状況に一石を投じて、もっぱら「創造の現場」が担ってきた舞台芸術の創造に新たな視点と方法と形態を導入しようとするのが本拠点の目的であった。それは「劇場実験」という手法による他に例がない試みであるだけに、この3年間の活動には、本拠点が置かれている舞台芸術研究センターが主催する多くの公演や大学の行事等との日程調整、劇場利用に付随する照明・音響・舞台機構の調整とその要員の確保、他分野にわたる学内外で活躍する多くのアーティストと研究者の協同など、劇場を使用することに伴う多くの問題に直面したが、この間、「テーマ研究課題」「公募研究課題」をあわせ、19の研究プロジェクトが意欲的な活動を展開し、そこにのべ210人もの研究者とアーティストが参加し、1,240時間にのぼる劇場使用の結果、われわれが<ラボラトリ一機能>と名付けている「創造のための研究や実験」という本拠点の初期の目的達成に向けた基盤作りができたと自負している。こうした横断的な研究活動は、同時にまた、「劇場を活用した

研究」を軸とした舞台芸術研究の新たな研究領域の確立という、われわれの中長期的な目標における基盤形成の実現でもあったと言える。

その上、こうした共同研究19のうち7プロジェクトは、国外の研究者・芸術家との共同研究であった（フランス、ドイツ、アメリカ、ロシア、韓国、シンガポールの研究者・芸術家等）。パリ第3大学、ジャパンソサイエティ（ニューヨーク）とのあいだに研究提携も実現し、国際的な視点から、本研究全体の研究課題を検証することができたのである。

また、本拠点の活動は関連コミュニティにも多くの影響を及ぼしてきた。いうまでもなく本拠点が関わるコミュニティには、「学術研究」と「創造の現場」という2つの領域があり、各プロジェクトの活動はまずその2領域の交流・連携に大きく寄与したが、関連コミュニティへの影響はそれにとどまるものではない。というのも、各プロジェクトの活動はその多くが公開で行われているが、そこにはプロジェクトの研究分担者や協力者以外の研究者やアーティストが関西圏はもとより東京方面からも数多く参集したからである。われわれはこれも「劇場実験」という手法の成果の一端と考えている。また、その「劇場実験」が舞台芸術研究センターによる本格的な上演につながったケースもあり、さらにその成果をうけて、本研究センター以外の事業として上演されたケースもあることは、関連コミュニティへの影響として特筆すべきことであろう。

本拠点の最大の特徴である「劇場実験という手法を用いての事業には多大の経費が必要であり、それは本学の経常経費をもってしては、とうてい遂行しえなかったレベルの事業であり規模の大きな事業であった。その点、この3年間のスタートアップ支援は本事業遂行のためには不可欠なものであり、その結果、当該分野の研究に大きな影響を与えることができたと考えている。

2. 評価結果

(評価区分)

A：事業の目的は概ね達成された。

(評価コメント)

舞台芸術の分野において、劇場という場を用いて、創造の現場と学術研究を結び付け、舞台芸術の創造に新たな視点と劇場実験という方法論を導入した特徴的な共同研究活動が展開されていることから、拠点としての活動は概ね順調に行われ、関連コミュニティにも貢献しているものと評価できる。

具体的には、スタートアップ支援を有効に活用することにより、劇場を活用した実験研究の手法により複数回の共同研究が実施され、国外の研究者や芸術家が参加するなど、国際的な拠点形成が図られている。また、劇場を用いた拠点形成によって、文献中心の研究からは解明できない課題点を抽出し、マルチメディアを導入した共同研究を実施することで、劇場と研究（ラボ）を結び付けるなどの様々な工夫による挑戦的な試みが行われている。

今後は、拠点の研究及び活動成果について、研究者コミュニティのみならず社会からも認知されるよう、広報活動を含めた効果的な情報発信を行うことが望ましい。加えて、拠点活動が継続的かつ安定的に展開するためにも、学内支援を含む体制の充実を図ることが望ましい。